
万葉の故地を訪ねて

大和路邂逅

国語科 - 2014年10月11日



同志社中学校 文学散歩 「海石榴市の八十の衢に」を終えて

去る10月4日（土）に、国語科の特別企画として、奈良の桜井・三輪の方面まで足を伸ばして、万葉文学散歩を楽しみました。全日は雨、翌日は台風のその間に、暑くもなく寒くもないというベストコンディションの中で実施しました。生徒6名（3年3名・2年3名）＋教員4名（うち国語科2名）という10名の歩きました。事前に要項を配布しておいたこともあり、京都駅での集合時間にも誰も遅れず、快調な滑り出しでした。

中学生に分かるようにと、案内をする私自身も少し丁寧に案内を行いました。でも事前に配布したしおりを読んでくれていたこともあり、桜井市の三輪の金屋の「海石榴市（つばいち）」の史跡から始まり、金屋の石仏、三輪神社、そして桧原神社へと歩を進めましたが、落伍者は全くありませんでした。参加生徒の中には、神社での参詣に備え、「二礼二拍手一礼」の作法などをきっちり行っている人もいて、驚かされました。また山の辺の

道を歩きつつ見学し、解説を挟むという大変な取り組みであるにも関わらず、きっちりと聞いてくれたのには、またまた驚かされました。

でもやはり中学生、昼食の桧原神社のお休み処では食事もし、こんにやく田楽も食べ、柿も食べたのに、まだ3種類のお店自家製シャーベットを楽しんでいました。それに無人販売の野菜なども「安い」と購入していたのが、印象に残りました。希望参加とは言え、私自身ひさびさに、人の話をしっかりと聴ける生徒たちに出会ったことが、新鮮な喜びでもありました。箸墓の見学も「どっちが前でどっちが後ろ」なのかと話しをしたり、卑弥呼の墓の可能性があるなどの話題が出たりして驚きました。また、保護者対象の勉強散歩もいいのでは?と思ったりもしています。(巽)



万葉の故地を訪ねて

中学国語で扱う古典作品の中で、平安時代以降のものは、京都に住み・通学している私たちにはなじみ深い場所も多くあるのですが、万葉の時代となると難しいものがあります。

日本の歴史を学び、その原点である地をたどり古代人の知恵に触れ、万葉に歌われた地を実際に歩いてみるのが今回の文学散歩の目的でした。

古代の姿をほとんどどぬ都市となってしまった京都に比べ、万葉の故地はかつての繁栄が田畑になり、自然に包まれた形で残されています。秋の好天の中、自然豊かな「山の辺の道」を歩くと、万葉の歌がよみがえり、当時の人々の魂が天から降りてくるような不思議な思いを抱くことができました。同時にモノづくりに長じた日本の原点を実感することもできました。

少人数の、本当に興味を持った生徒と会話しながらの歴史散歩。こちらが教えてもらうことも多くありました。また、この地を故郷に持ち、万葉研究を続けておられる巽康眞先生のスペシャルガイドがあったからこそその有意義な時間であったと思われま。 (矢淵)

